

保育士養成課程におけるプロセスレコードを用いた 乳幼児理解の学習実践（1）

—実践事前・事後アンケートの結果より—

西口裕久子¹⁾，佐々木恵理²⁾

¹⁾大阪芸術大学芸術学部，²⁾岐阜女子大学文化創造学部

（2024年11月5日受理）

Learning Practice of Infant Understanding Using Process Records in the Nursery Teacher Training Course ; From the Results of the Pre-Practice and Post-Practice questionnaire

¹⁾Osaka University of Arts, 469 Higashiyama, Kanantyo,
Minamikawachi, Osaka, Japan (〒585 - 8555)

²⁾Department of Cultural Development, Faculty of Cultural Development,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501 - 2592)

NISHIGUCHI Yukiko¹⁾， SASAKI Eri²⁾

（Received November 5 , 2024）

要 旨

保育に従事する者にとって、「子どもを理解することが保育の出発点」であると言われている。子どもの理解のためには、実際に子どもと関わる中で気づきを得ることが最良であるが、保育士養成課程で学生が子どもと関わる体験のできる場は見学や実習等、限られた時間しかないのが現実である。そこで、看護師養成教育では一般的な手法であるプロセスレコードを保育士養成教育用教材として開発し、実習事前学習として行われるふれあい体験をもとにプロセスレコードを書き、グループワークを行う演習を実施した。また、事後アンケートを行い、学生が、どのような場面で戸惑いや困難を感じているのかを明らかにし、子どもの言動の奥にある本当の気持ちに気づき、どのように関わればよかったかを考察するという学習を通して、子ども理解、自己理解の一助となることを検証した。その結果、学習内容や効果の程度に差はあったものの保育士養成課程の学生に対しても一定の学習効果が期待できると考えられた。

キーワード：乳幼児理解，プロセスレコード，保育士養成

I. 問題

1. 保育士養成課程の学生の現状

大学、専門学校等の保育士養成課程では、子どもの心身の成長と発達を理解及び保育技術を習得し、保育者として現場での実践力を身につけることを目指して、講義・演習・実習のカリキュラムが組まれている。そして、その中ですべての基礎となるのが子どもの理解である。文部科学省（2019）「幼児の理解に基づいた評価」では、「幼児を理解することが保育の出発点となり、そこから、一人一人の幼児の発達を着実に促す保育が生み出される」と、保育においては、「子どもを理解する」ことの重要性や必要性が示されている。一人ひとりの子どもを中心に据えた保育を行うためには、子どもを理解することから始まると言っても過言ではない。子どもの理解のためには、実際に子どもと関わる中で気づきを得ることが最良であるが、子どもと関わる体験のできる場は見学や実習等、限られた時間しかないのが現実である。そこで、この貴重な学びができる保育実習が、より有意義なものとなるように準備をすることがすることが重要となる。

実習事前学習内容としては、乳幼児の心身の発達について学ぶ科目や保育技術を習得するためのさまざまな科目があり、学生はこれらの学習を通して知識や理論、保育技術を習得する。しかし、いずれも実際の子どもの演習は不可能なため、事例検討やロールプレイによる擬似体験学習を行っている。事例検討やロールプレイでは、事例内に登場する人物（子ども）に心を寄せ、その時の子どもの気持ちを想像して、仮説を立てることが不可欠であるが、学生の中には想像力に乏しく事例検討に広がりがなかったり、ロールプレイでどうしたらいいのかわからなかったりとい

う学生が散見される。そこで、科目の学習では習得しにくい部分を補うはずの事例検討や擬似体験学習が難しいのは、学生のどのような実態によるものか調査し考察を行うことにした。

次に、学生はこれらの学習を通してある程度の子どもの理解をして実習に臨む。保育士養成校における保育士養成課程の保育実習では、保育実習Ⅰ（保育所）・保育実習Ⅰ（施設）・保育実習Ⅱ（保育所または施設）の3回、各10日間の実習を行う。実習では、実際に子どもたちと関わりながら、それまでに学んできた乳幼児の保育に関する学びを確かなものとすべく観察・参加実習から責任実習へと段階を追って学びを深めていく。

しかし、第1段階の観察・参加実習で、子どもたちの中に入っていきえずに棒立ちになってしまったり、自分に寄って来た目の前の子どもだけと関わり全体を見渡すことができなかったり、また、言葉の未発達な乳児に対しては、何を話せばよいのかわからないからと言葉がけができない等々といった様子があり、実習後のふりかえりでは、子どもへの関わり方に対する課題を反省にあげる学生が多く、実習指導者からも同じく指摘を受けることが多いのが現状である。

そこで、子ども理解を深め、実習という貴重な機会を有意義な学習の場にするために、実習事前学習でプロセスレコードを書くことを取り入れる。学生自身が、子どもとの関わりの中で、どのような場面で戸惑いや困難を感じているのかを明らかにし、どのように関わればよかったかを考察することができるのではないかと考えた。

2. 子どもを理解すること

「子どもを理解することが保育の出発点」と言われているように、子どもを理解するこ

との必要性や重要性について多視点から様々な研究がされている。

木田（2023）は、「保育者の『理解しよう』とする背景には、保育において「子ども理解＝理解困難」であるとの観点が存在することが指摘されている。」とし、ゆえに、「『子ども理解』において完全な『理解』というものは存在しないことを自覚し、暫定的な『子ども理解』をし続ける必要性が示される。」としている。そのためには、「暫定的な子ども理解における保育者の姿として、不安定さや不確実さをもって、『子どもを理解しよう』とする姿、常に自己の『子ども理解』を問い直し、自らの保育を省察する姿が考えられる。『子ども理解』の『理解』が意味するのは、揺れ動く子どもの姿を丁寧に『見る』ことなのではないか。」として、「子どもの心に寄り添おうとする姿勢を持つこと」の重要性と必要性を論じている。

権藤・柴・戸江（2017）は、子どもを理解するということは、保育者が保育の中で目の前の子どもと生活しながら子どもの言動や表情から、1人の子どもを理解していこうと努力することであると考えとし、子どもを理解する時の視点として以下の3点を示している。

- ①現れた姿をその子どもの良さとして受け止める。
- ②これから発達する姿として捉えていく。
- ③現れた姿から心の動きを受け止め理解しようとする。

また、保育者が保育記録をもとに子ども理解を深めるために必要であることとして、以下の3点を示している。

- ①行動、表面に現れた表情、幼児のつぶやきを細かに捉えていく。
- ②保育者間で意見交換をしながら保育者自身の子どもの理解を振り返る。

- ③保育者のものの見かた、考え方を見直していく。

保育者が子ども理解を深めていくには、保育者は日々の保育の中で、子どもの言動やつぶやき、保育者の目の前を何事もなく通り過ぎ去ってしまうささやかなことがらを、細やかに心に留め、表面的な理解に留まることなく、その子どもの内面に沿った理解をしなければならない。つまり、保育者は日頃から子どもの良さ、育っている姿を常に見極めながら瞬時に子どもの内面（心の動き）を読み取り、その心に寄り添って保育していくことで少しずつ深く理解できるようになると考える。

文部科学省（2019）「幼児の理解に基づいた評価」では、「幼児を理解するとは一人ひとりの幼児と直接に触れあいながら、幼児の言動や表情から、思いや考えなどを理解しかつ受け止め、その幼児の良さや可能性を理解しようとすることを指しているのです。そのためには、安易にわかったと思い込んだり、この子はこうだと決めつけたりしてしまうのではなく、幼児と生活を共にしながら、『……らしい』、『……ではないか』など、表面に現れた行動から内面を推し量ってみることや、内面に沿っていこうとする姿勢が大切なのです。」としている。子どもと直接かわり、その中で実際に見られる子どもの外面からその奥にある内面を理解しようとして、子どもの心に寄り添おうとする姿勢を持つことが大切だとしている。

保育場面は、対象児が同じであっても対象児は日々成長しており、その活動は多様に展開し個性が高く一つも同じ状況や場面は存在しない。そのような子どもを理解することは非常に困難なことで、容易に正解が得られるものではない。しかし、子どもにとって日々

の生活や遊びの行為が重要な学びの機会となるためには、保育者は目の前の子どもの気持ちを理解して即時判断で適切な援助ができる力量が必要である。そのためには、保育者は子どもと生活を共にする中で常に目の前の子どもを理解しようとする態度をもって子どもと関わり、子どもの内面を推測しながら子どもの内面に寄り添おうとすること、そして、その自分の関わりを省察する行為を繰り返しながら前に進むことであると考え。

3. プロセスレコードとは

プロセスレコードは、アメリカの看護学者ヒルデガルド・ペプロウ (Peplau, H.E, 1952) が提唱し、特に精神看護領域において、看護師や介護士養成課程では、患者や高齢者の理解のために一般的に用いられている手法である。看護師と患者および介護士と要介護者間のコミュニケーションの気になった会話や行動を時系列に沿って一つひとつを文章で記録し、対象者が何を思ってそのような言動をしたのか、それに対して自分のとった言動は対象者にどのような影響を与えたのか等々を考察する。それにより、対象者や自分の言動の真意や傾向、よりよい関わりのためには何を大切にすればよかったのかを確かめることができるものである。

4. 看護教育分野におけるプロセスレコードの先行研究事例

看護教育分野における先行研究では、多久島・田中・中原・羽田野・山本 (2015) が、大学の看護学科の学生が書いたプロセスレコードの分析とそれをういた事例検討をする研究を行っている。多久島らは、プロセスレコードの記載内容を Porter の態度分析5類型 (調査的態度、指示的態度、解釈的態度、評価的態度、理解的態度) で分析した結果、調

査的態度が46.3%であった。患者の役に立ちたいと思っけていても、コミュニケーション技術が未熟なため看護過程の情報収集において自分中心の「きく」になり患者に不快な思いをさせてしまっていた学生が、プロセスレコードを書き、それを基にした事例検討を行うことで自己と向き合い他者と向き合うことができ自己理解と他者理解を深め積極的傾聴の姿勢を育成する上で有効な教育方法であるとしている。

また、福永・吉村 (2014) は、短期大学の看護学科学生に対しプロセスレコード演習とグループワークを行い、プロセスレコードの場面を選んだ理由を「不完全」「一体感」「違和感」に分類したものと「実習を終えて学んだこと」を内容分析した結果、プロセスレコード演習で得た学びを今後のコミュニケーションの学習や実習に活かしたいと学習動機が高まっており、看護基礎教育初期に行う授業として効果的であったとしている。

このように、看護教育分野では、対人援助職を目指す学生にとって必要となる自己理解・他者理解を促し、コミュニケーション技術の向上に効果的であるとしている。

5. 教育・保育分野におけるプロセスレコードの先行研究事例

教育分野における先行研究としては、山口・山口 (2004) が、「人間の生成とケアに関わるという点で教育学と近接関係にある看護学の知見から得られるヒントは大きいと思われる。」として、これまで看護教育の分野で使われてきたプロセスレコードを教員養成において自己省察に活用するにあたり必要となる方策や今後の課題を明らかにした。この先行研究では、以下の2つの課題が述べられている。1つ目は、指導上の問題である。看護実習では、毎日のように実習指導者が学生の実

習に同行し、個々の学生を観察している。教員も学生が書いたプロセスレコードに記録されている場面を同時に見ている。しかし、教育実習では、実習校に指導が一任され大学の教員は実習巡回に行くのみであり、日々の学生の実習の様子を観察することはない。そのため、実習後に大学教員がプロセスレコードを指導する体制が整っていないという点である。2つ目は、教育の現場では、教師と子どもの関わりが1対多であることが多い点である。看護では本来、1対1での会話をもとに互いの相互作用を省察する。そのため、教育分野での導入のためには、記入様式の検討が必要であると述べている。

久米・石井（2020）は、中学校に勤務する養護教諭3名を対象として「生徒の心理的問題への個別対応において養護教諭が違和感や困難感を抱いた場面」の記入を3回行い、それぞれについて、①態度分析 ②違和感の検討 ③ロールプレイの3つの演習を行った。その結果、対象者の個性や勤務経験年数によって受け止め方が違ったが、「生徒対応の背景にある自分の思考や感情がある程度意識化されたと考えられる。また、生徒側の認識や、生徒の感じ方や受け取り方について新たな気づきが語られ、生徒理解も深まったと考えられる。」としている。また、今研究は、筆者と対象者が1対1で個別演習を行ったが、グループ演習として実施することでグループ内の相互作用における効果が生じることも期待出来るとしている。

角田・柴崎（2017）は、現役教師の研修としてプロセスレコード演習を取り入れた研修を行い、プロセスレコードの有用性の検討を目的とした研究を行った。研究では、山口・山口（2004）のプロセスレコード用のフォーマットをもとに修正を加え開発を行った。また、それまでは、教師・実習生が、対応に困っ

た場面という負の場面を選んで書いていたが、「正のエピソードにおいて何が成長促進的に働いたのかを理論に照らし合わせて認識することも、関わり合いの本質をとらえ、今後に生かす上で有意義なことである。」とし、また、同じ対象者との複数の場面を継続して記入して一連のプロセスレコードについて総合的な省察をするという方法を開発した。教師が事例研究会で発表する時に用いる「事例研究用フォーマット」にもプロセスレコードを組み入れることを提案している。それにより、エピソードを記述する項目が加わり、事例研究において関わり合いへの注目度が高まることが期待されるとして、「初心者としては、まずプロセスレコードを用いて様々な子どもとのかかわり合いの場面を振り返ることからはじめ、経験を重ねる中で成育歴や家族歴といった背景を踏まえた、より視野を広げた事例研究へと移行していくことが一つの方向性と言えるだろう。」として、新任教師からベテラン教師までの研修におけるプロセスレコードの適切な活用の仕方を示した。

保育分野では、山本（2009）が、保育実習（施設）で学生の実習に対する意識の変化と実習効果について研究した。学生に対してプロセスレコードの事前指導後、実習中に1例、実習後に1例、計2回の演習の実施を行い、事後アンケートの結果を分析した。また、学生が書いたプロセスレコードの「子どもの言動」「学生の思い」「学生の言動」「まとめ」の欄を分析した。プロセスレコードで自己の振り返りをする事は、「子どもと学生との関係でより踏み込んだ記録となり、学生自身の振り返りの中で自分自身の内面に気づき、自己錬磨することで専門職としての自己を形成する一助になったと考えられる。」としているとし、保育実習（施設）にプロセスレコードを導入したことは保育者である自分を客観

視するのに有効であったとしている。

山口(2008)は、幼稚園実習で学生が実習中に書いた3歳児と5歳児のプロセスレコードをもとに子どものいざこざの場面における子どもの人間関係の発達についてパースペクティブ性の獲得という視点を中心に研究した。

このように、保育教育分野でもプロセスレコードを演習に活用した研究がされているが、その多くが子どもとの関わりの場面での自分自身の関わり方の特徴や傾向から自身の内面に気づきを得るということを目的として行われたり、子どもの発達過程の研究として行われたりしてきた。保育士養成課程の学生が子ども理解を深めることにどのような効果があるかを目的としてプロセスレコード演習を取り入れた報告はない。

6. 教育・保育分野におけるプロセスレコードによる子ども理解

教育・保育分野では、先行研究も少なく、馴染みのない手法であるが、会話や行動を思い返して一つひとつ時系列で記入し、その一つひとつに自分のその時の気持ちや考察を記入するプロセスレコードは、現在、保育でよく用いられているエピソード記録やドキュメンテーションより、双方の心の動きを詳細に追うことができるため学生はより丁寧に確かな考察ができると考えた。

保育現場において、プロセスレコードを活用することにより、図1のような子どもを理解するためのサイクルとプロセスレコードの関係が考えられる。図1は、大阪府幼児教育センター(2022)「幼児教育リーフレット 子ども理解編—幼児教育に関わる教職員の育成指標—」を参考に作成した。

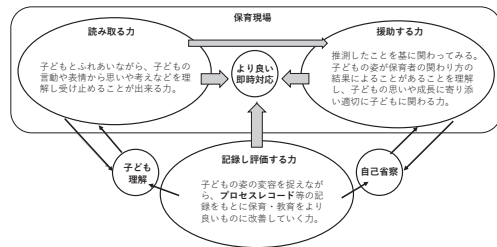


図1 子どもを理解するためのサイクルとプロセスレコードの関係

II. 目的

プロセスレコードを書くことで、学生が、どのような場面で戸惑いや困難を感じているのかを明らかにする。また、子どもの言動の奥にある本当の気持ちに気づき、どのように関わればよかったかを考察するという学習を通して、子ども理解、自己理解の一助となることを検証する。これにより学生が子ども理解を深めるとともに、自分の子どもとの関わり方や自分の考え方の傾向を知ることができ、ため、保育者としての資質の向上につながるのではないかと考える。

III. 研究方法

1. 調査対象者

4年制大学の初等教育学科で保育士養成コースを選択する2年生10名。

2. 調査期間

2022年4月から2022年12月

3. 方法

(1) 調査対象者の実態調査の実施

本調査対象学生のこれまでの乳幼児との関わりの経験や乳幼児と関わることにに対する自分自身の気持ち、実習場面で想定される子どもへの関わりに対する不安

感についてアンケート形式で調査を行った。

（2）保育学生を対象としたプロセスレコード演習授業の開発

①プロセスレコード記入用紙，②授業教材の開発，③授業指導計画の3つを作成した。

（3）プロセスレコード演習授業の実施

4回の課題とグループワークを取り入れた演習授業を実施した。

（4）事後アンケート調査の実施

プロセスレコードへの取り組みや演習後の子ども理解の深まりと関わり方の変化について調査を行った。

4. 倫理的配慮

調査協力者である学生には，研究目的を口頭で説明し，調査結果を保育の研究に利用することについて同意を得た。

IV. 実践内容

1. 保育学生を対象としたプロセスレコード記入用紙の開発

本研究で使用するプロセスレコードの開発においては，角田・柴崎（2017）プロセスレコード用のフォーマットを参考にした。その上で，子どもと関わった経験が少なく，自分の体験を文字に起こして考察する経験の少ない調査対象学生がプロセスレコードの記入することへの配慮として，以下の点を改良した（図2）。

- ① 「対象の子どもの普段のようす」を記入する欄を設け，対象児をよく観察し，この場面での言動と比較して分析・考察しやすいようにした。
- ② 記入用紙の大きさは，記入への負担感を減らすためにA4用紙1枚に収めるよ

月 日（ ）	保育場面 （ ）歳児		
この場面のプロセスレコードを書こうと思った動機			
対象の子どものようす			
子どもの言動	感じたこと・考えたこと	私の言動	分析・考察
この場面から学んだこと			

図2 プロセスレコード記入用紙

うにした。

また，記入方法として，以下のルールで書くこととした。

- ① 「この場面のプロセスレコードを書こうと思った動機」には，その時，自分が感じた違和感をそのまま記入する。口語的な書き方でもよい。
- ② 数人のグループで一緒に活動している場面を切り取る場合もあるため，対象児は，複数名（2～3名）でも構わない。ただし，クラス全体の様子を書くものではない。
- ③ 「子どもの言動」「私の言動」は，会話部分はそのまま記入する。また，無言の場合は「……」や「無言で」と書き，その時の表情や態度といった非言語部分をできる限り丁寧に記入する。
- ④ 「感じたこと・考えたこと」は，その瞬間に自分が感じた・考えた心の声をそのまま記入する。口語的な書き方でもよい。
- ⑤ 時系列がわかるように，「子どもの言動」「感じたこと・考えたこと」「私の言動」の文頭に番号をつける。

- ⑥ 「分析・考察」は、この時の様子をプロセスレコードに記入してみて、客観的にふりかえり、対象児や私はなぜこのような言動をしたと考えるか、どうすればよかったと考えるか等々自分の気づきを記入する。
- ⑦ 「この場面から学んだこと」は、全体を通して、気付いたこと、理解したこと、今後の課題等を記入する。

2. 授業用教材の開発

授業時に配布するための資料として、「プロセスレコードを説明するための教材」「プロセスレコードの記入方法を説明するための事例」「プロセスレコードの記入方法を説明するための記入例」「学生が実際にプロセスレコードを記入する学習時に用いる事例」を作成した。

3. 授業指導計画

授業は以下のように指導計画を立案し実施した。

第1講 10月13日 (90分)	プロセスレコードについて知る プロセスレコードとは何か。 事例を用いプロセスレコードの書き方を理解する。
自己課題	ふれあい体験をプロセスレコードに記入 (2回)
第2講 11月5日 (30分)	進捗状況の確認(グループワーク) 実際に書いてみた感想や疑問点、困っていること等を出し合う。
自己課題	ふれあい体験をプロセスレコードに記入 (2回)
第3講 12月3日 (90分)	ふりかえり(グループワーク) 子どもの行動や気持ちの理解についてふりかえる。 自分自身の子どもへの関わり方や考え方の傾向をふりかえる。 演習事後アンケートの実施。
第4講 12月10日 (30分)	まとめ アンケートの報告

V. 結果と考察

1. 事前アンケートの結果と考察

2022年4月本研究対象学生に事前アンケートを行い、実態調査をした。

子どもと関わった経験を「①ほとんどなかった ②少ないがあった ③あった ④とてもあった」として尋ねた設問では、10人中5人が子どもと関わった経験が「ほとんどなかった」と回答。4人が「少ないがあった」と回答したが、その経験は、「中学校の職場体験で保育園に行った。」等、非常に少ない経験であった。

保育実習等で想定される場面である、1. 乳幼児の発達や特性の理解、2. 食事や排泄等の生活面の援助、3. 保育者が設定保育を行っている時の乳幼児に対する声掛けや援助、4. 保育者が設定保育を行っている時に保育者の指示に従い援助ができるか、5. 自由遊びの時の乳幼児との会話、6. 自由遊びの時の乳幼児との遊びについて、「①不安である(1点) ②少し不安である(2点) ③少し自信がある(3点) ④自信がある(4点)」の4件法で尋ねた。

この各場面での得点を合計し、合計得点が高いほど自信があり、低いほど不安感が高いことが示されるようにした数値と子どもと関わった経験を尋ねた設問の結果を合わせて集計したところ、表1のようになった。これまでに子どもと関わった経験が「ほとんどなかった」と回答した5人の保育実習6場面に対する感じ方の合計得点の平均が11.2であるのに対し、「少ないがあった」と回答した4人のそれらの平均は、15.8と高い数値であった。

このことから、非常に少ない経験であっても、子どもとの関わりがあった学生は、今後の子どもとの関わりに対して、不安感が少な

表 1 乳幼児に関わった経験と保育実習の 6 場
面に対する感じ方の関係

乳幼児との ふれあい経験	人数	保育実習 6 場面に 対する感じ方の合計得点の平均
ほとんどなかった	5	11.2
少ないがあった	4	15.8
あった	1	15.0
とてもあった	0	0

いことがわかった。中学校での職場体験や、姪や甥が遊びに来たときに関わるといった時間的にはとても少ない経験であっても、そのような経験をしたことがあるということが、子どもとの関わりへの不安を軽減していると示唆される。

2. 授業実践時の様子

第 1 講では、プロセスレコードの概要を説明し、ふれあい学習体験で実際に体験したことをプロセスレコードに記入することで、乳幼児理解の学習を行うという学習の方法と目的を説明した。

事例 1（水遊び時、A ちゃんが遊んでいるおもちゃを使いたそうにしている B ちゃんを見て、B ちゃんに「かして」と言うことを提案し、うまくいったが、その後の A ちゃんの様子が気になったという場面。）を用いた書き方の説明では、プロセスレコードは、本来は実際の会話を中心に表情や態度を含めて記入するものであるが、言葉での表現が未発達な乳幼児を対象とするため、会話が十分にできないことを考慮し、言葉で表現されなくても、その表情や態度を丁寧に記入することを強調した。

事例 2（朝の受け入れ時間に持ち物を片付けずに遊びに入ってしまった A ちゃんと周りの子どもがトラブルになりそうだったので声をかけたが、その時の A ちゃんの態度が気になった場面）を用いて、自分でプロセスレ

コードを書いてみる練習をした時には、事例の内容を読んで、「こんな子いるよね。」「うん、私もこの前ちょっと注意したら、何か小さな反抗されたわ。」と事例の場面に共感する声や登場人物の A ちゃんに気持ちを寄せる声が聞かれた。書き上がったプロセスレコードからも、そのような互いの会話からヒントを得ながら考察を書き進めた様子が見られた。書き始めてから約 30 分で書き上げることができていた。

その後、書画カメラで学生が書いたプロセスレコードを写し、「分析・考察」の書き方を中心にクラスメイトがどのようなことを書いているかを互いに見ながら説明した。学生は、他の人の分析・考察を大変興味深く見ている様子であった。

初めて自分の体験をもとにプロセスレコードを書いた時、複数の学生から「書くことが見つからない」という声が聞かれた。理由を尋ねると、「自分のことで精一杯で、子どものことをよく見ていない」「何を話したか覚えていない」「トラブルはなかった」ということであった。プロセスレコードはトラブルの解決方法やトラブルの際の自分の関わり方を省察するだけのものではなく、子どもの言動の「何故だろう」と思ったことを書くことで、子どもの気持ちやその言動の奥にある本当の思いを子どもの心に寄り添って考えるものでもあることを再度強調すると、しばらく考えた後、書き始める様子が見られた。そして、回を重ねるごとにそのような声は聞かれなくなった。

3. 事後アンケートの結果と考察

9 人の学生から事後アンケートの回答が得られた。

(1) プロセスレコードを書くことに対する 学生の心情

書こうと思う内容はすぐに見つかったかという設問に対し、初回プロセスレコード記入時には、書く内容が見つからないと言う学生が3人いたが、事後アンケートでは全員、書こうと思った内容は、「すぐに見つかった」か「少し考えると見つかった」という回答であった。当初はプロセスレコードを書くために子どもとの関わりを記憶しておこうという動機であった可能性がある。しかし、4回のプロセスレコードの記入を通して、子どもをよく観察しようという意識が高まり、よく観察したことで、同じ場面に出くわしても、そのことが気になり、立ち止まって考えてみようと思うことができるようになってきたと考えられる。

プロセスレコードの各部分を書く時、どのくらい難しいと感じたかを「①難しいと感じなかった から ④とても難しく感じた」まで4件法で回答した結果を図3に示した。

4回の演習の積み重ねで、記入にはさほど苦労しなくなった様子が見られる。

唯一「分析・考察」は、「難しいと感じた」「とても難しいと感じた」が過半数を占めている。体験した事実をそのまま記入すればよい他の部分に比べ、「分析・考察」はその場面を詳細に振り返り記入しなければならない。子どもの行動の分析では、その時、その

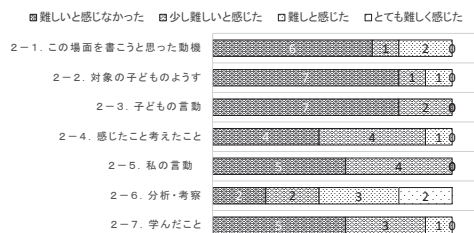


図3 プロセスレコードの各部分を書く時に難しく感じた程度

子どもは、何故そのような言動をとったのかを様々な角度から推察する力が必要であるが、子どもとの関わりの経験が少なく、その上、学生には、その子どもの背景の情報収集を十分にすることができないため、推測がしにくいのではないかと考える。また、自分の言動の分析の際には、自分の心の奥にある気持ちも掘り起こして省察しなければならないこともあるため、正面から自分に向き合うことで生じる自分に対する違和感を受け止め改めて考えることは誰でも多少の困難を感じる作業であると理解できる。

(2) プロセスレコード演習後の学生的心情・ 態度の変化

演習後、子どもに対するとらえ方や関わり方に変化があったかという設問に対しては、「変わっていないと思う」という回答は1件もなく、個人差はあるが何らかの変化があったと捉えている様子が見られた。どのような変化があったのかについては、4回のプロセスレコードの記入用紙を考察することで明らかにした。

(3) プロセスレコード演習後の子ども理解 の変化

プロセスレコードの演習をやってみて、次のことについて理解できるようになったと思うかを「①理解できるようになった から ④理解できない」まで4件法で回答した結果

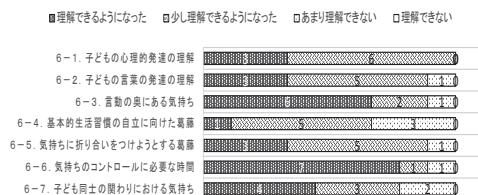


図4 演習後、どのようなことが理解できるようになったと感じているか

を図4に示した。

すべての質問で、「④ 理解できない」という回答はなく、「① 理解できるようになった」と「② 少し理解できるようになった」の合計が「③あまり理解できない」を大きく上回った(図4)。捉え方や感じ方には個人差があり、その程度にも差があるが、この演習を行う前より子ども理解が進んだと感じていることがわかる。特に、「6-3. 子どもの言葉・表情・態度などの奥にある子どもの気持ち」と「6-6. 子どもが自分の気持ちをコントロールするのに必要な時間」は、「②少し理解できるようになった」よりも「①理解できるようになった」の人数が上回っている。子どもとのかかわりの中では、特に出会う場面が多く、保育者の関わり方に学ぶ機会があったり直接自分が関わったりしたため理解が進んだことがわかる。

(4) グループワークの効果

全員が、他の人のプロセスレコードの報告が参考になったと回答した。他の人のプロセスレコードの報告を聞いた感想を自由記述した設問では、「自分が直面したことのないような場面の話を聞くことができて、自分だったらどうするかな?と考える機会にもなったし、他の人はこうするんだということを知る機会にもなって、経験値がぐっと上がるような感じがした。」や「自分だったらこの場面でこのような対処・対応ができないと思うから、他の人はこんな言葉がけで子どもたちに寄り添うことができたんだという新しい考えを持てるようになった。」という感想が書かれていた。友達の報告内容に心を寄せて疑似体験をし、自分の体験と照らし合わせて、自分の言動を省察し、子どもとの関わり方に新たな気づきを得ていることがわかる。

(5) 演習による学び

自由記述の回答を意味内容ごとに整理したところ、20件あがった。自由記述の内容をKJ法によりを分類した結果が、表2である。

自由記述では、「子ども一人ひとりともっと深く関わろうとか、今、他の子はどんな反応をしているかなとか、周りをよく見ようとする意識が今まで以上に持てるようになった。」とあった。授業実践時の様子からも分かるように、子どもの言動をしっかりと捉えようとする観察力が高まったと考える。

また、「子どもの気持ちや『この時なぜこのような行動をとったのだろう』と一つ一つの行動に意味があるのではないかと考えるようになった。」からは、子どもをよく観察するようになったことで、子どもの言動の奥にある本当の気持ちを理解しようと心を寄せ、より深く考えようとしていることがわかる。

「今までは自分の考えだけで子どもたちと関わっていた。」と気づきを得ていることから、子どもの本当の気持ちを考察し、自分の関わり方を省察することは、容易ではないと感じながらも、それらが大切であることを理解し、自分の課題を発見し、積極的に取り組みたいという気持ちを持っていることがわかる。

VI. 総合考察

プロセスレコード演習の学習実践を通して、学生は、子どもの言動の奥にある本当の気持ちとその意味を理解しようとして、子どもの心に寄り添いより深く考えようとする態度で子どもと関わるようになったことがわかった。そして、その中で、自分のとった言動を省察し、自分の考え方の傾向を知ることによって自己の課題を発見している。また、それらをグループの中で発表し合うことに

表2 プロセスレコード演習後の感想

上位 カテゴリー	カテゴリー	具体的な記述例	記述 件数
観察力	子どもをよく観察するようになった	プロセスレコードに書いた子どもを次の週に見ると成長しているなと感じ、今後の成長も気になり、よく目を向けるようになりました。	1
	子どもを観察しようとする意識の高まり	“子どもひとりひとりともっと深く関わろう”とか、“今、他の子はどんな反応をしているかな”とか、周りをよく見ようとする意識が今まで以上に持てるようになった。	2
		プロセスレコードを書くために子どもと話したことや行動を見ようという意識が持てたので良かった。	
	書きたい場面との出会い	書きたいなって思った場面に出会うことができました。	1
子ども理解	子どもの本当の気持ちの理解	プロセスレコードを書くことで、子ども同士の関わりの中で起こる本当の気持ちを理解できるようになった。	1
	子どもの行動の意味	プロセスレコードを書くことによって子どもの気持ちや「この時なぜこのような行動をとったのだろう」と一つ一つの行動に意味があるのではないかと考えることができるようになりました	1
	子どもへの新しい気づき	流れの中の一部分を切り取って考えることで、冷静に客観的に自分の行動、子どもの様子を見ることができて、その時はなかった新しい気づき見つけることができるなと思った。	1
	子どもの気持ちの理解の深まり	子どもと自分自身への理解がより深まったと思う。	1
自分の言動の 省察	自分の子ども理解に対する自信	現場の時には、何故そのようなことをするのかわからなかったことでも、プロセスレコードを書いてみると、何があつてこういう行動をするのか分かったため、現場にいるときも考えればできるんだということに気づいた。	1
	自分の子どもへの思いや言動の傾向の省察	自分の言動から考えていたことまで細かく振り返ることが出来るので、この言葉は良かったが、この行動はまずかった、この時のこの子の言っていたことが理解できていなかったなど、良い点、悪い点を具体的にみることができた。	2
		流れの中の一部分を切り取って考えることで、冷静に客観的に自分の行動、子どもの様子を見ることができて、その時はなかった新しい気づき見つけることができるなと思った。	
	自分理解が深まった	子どもと自分自身への理解がより深まったと思う。	1
グループワーク での学び	多様な解決方法が得られた	その行動を振り返ることで次に似たような場面に直面したとき、また違った行動に繋がっていくのかなと思った。	2
		自分が他の人のような場面に遭遇したとき、このような対応や言葉がけをしたら良いのか・・・ということを学ぶことが出来たのがよかった。	
	他の人の報告が参考になった	自分の行動や言葉がけを振り返ることが出来たとともに、他の人のプロセスレコードの報告を聴けたことがとても参考になった。	1
	他の人の意見が参考になった	人の意見もきけて、かなり参考になったと思うし、学びも多かった。	1
演習自体の感想	プロセスレコードに対する感想	活動の一部を切り取って、そこだけを深く考えたことがなかったの で、終わった後に振り返るという意味でも勉強になりました。 体験して終わりではなく、考察することが大切だと学びました。	2
	プロセスレコードを書くことに対する感想	最初は書き方がわからなくて時間がかかっていたけれど、何回か書いていううちにコツをつかめるようになりました。	2
		頑張ってプロセスレコードを書きました。	

よって、友だちの報告内容に心を寄せて疑似体験し、自分の体験と照らし合わせて、再度、子どもの気持ちに心を寄せ、自分の言動を省察し、子どもとの関わり方に新たな気づきを得て学びを深めることが出来た。このように、保育士養成課程の学生であっても子ども理解の一助となり、一定の効果が期待できることがわかった。

今後は、ふれあい経験の各グループより抽出した学生のプロセスレコード記入内容の詳細分析を行い、プロセスレコードを書くことによる学生自身の子ども理解がどのように深まり、子どもへの関わり方がどのように変化していくのかという心情・態度の変容と現場での即時対応の可能性について報告したい。

引用文献

- 福永ひとみ・吉村恵美子 (2014) 看護とコミュニケーション授業「プロセスレコード演習」における教育的効果—場面を選んだ理由と学びの分析から—, 川崎市立看護短期大学 19 (1), 1-9.
- 権藤真織・柴ひろ・戸江茂博 (2017) 保育者養成教育の視点からみた「子ども理解」, 神戸親和女子大学児童教育学研究, 37, 55-69.
- H. E. Peplau (1973) ペプロウ人間関係の看護論 (稲田八重子他, 訳), 医学書院.
- 角田豊・柴崎朱音 (2017) 「学校臨床力」とプロセスレコードによる教師の省察, 京都教育大学紀要, 131, 1-15.
- 木田千晶 (2023) 「子ども理解」研究の変遷から見た「子ども理解」という言葉の解釈と潜在的な課題, 保育学研究, 61 (1), 115-126.
- 久米禎子・石井景子 (2020) 「プロセスレコード演習」が養護教諭の自己理解と生徒理解にもたらす効果, 鳴門教育大学学校教育研究紀要, 34, 17-26.
- 文部科学省 (2019) 幼児の理解に基づいた評価. チャイルド社, 3.
- 大阪府幼児教育センター (2022) 幼児教育リーフレット 子ども理解編 幼児教育に関わる教職員の育成指標. https://www.osaka-c.ed.jp/oykc/information/leaflet/pdf/r_03_leaflet_kodomo.pdf (情報取得 2023 / 12 / 1).
- 多久島寛考・田中康子・中原恵美・羽田野花美・山本勝則 (2015) 自己理解と他者理解を深める事例検討会の意義と教育的効果—患者との援助的関係形成力の育成に向けて—, 保健科学研究誌 Journal of Health Sciences, 12, 41-52.
- 山口美和 (2008) 幼児の『経験』と保育内容—幼児のバースペクティブ性の獲得を中心に—, Annual report of training nursery teachers of Ueda Women's Junior College Infant Education Department, 4, 55-63.
- 山口美和・山口恒夫 (2004) 教師の自己リフレクションの一方法としてのプロセスレコード—看護教育及び看護倫理との関連から—, 信州大学教育学部紀要, 112, 133-144.
- 山本千昭 (2009) 保育実習 (施設) におけるプロセスレコードの活用—精神力動的な看護の視点を導入して—, 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 8, 233-243.

謝辞

本研究と論文執筆にあたり、本研究の調査、実践においてご協力くださいました学生の皆様に心より感謝申し上げます。

付記

本論文は、第1筆者が令和5年度岐阜女子大学大学院に提出した修士論文を加筆修正したものです。

